

福浦地先放流アワビ生息状況調査

由木雄一・中村初男・木村 秀

この調査は、三隅町漁協の依頼により、福浦地先で放流されたアワビのその後の生息状況を把握し、今後の漁獲の方法を検討するために行ったものである。

調 査 方 法

調査定点は図1に示すA～Cの3点である。定点Aは人工礁が設置されている場所で、水深3～5mの転石帯に人工礁が点在する海域である。ここでは、海底に長さ30mのラインを張り、それに沿って採集と観察を行った。定点Bは小が島の西側で水深5～13mの起伏の激しい岩礁帯である。ここでは、水深7～10mの岩盤の亀裂、転石を中心に10分間のランダム採集と観察を行った。定点Cはアワビ種苗の放流が行われた場所で、水深2～4mの転石帯である。ここでは、10分間のランダム採集と観察を行った。

採集の対象としたのはアワビ、サザエの成貝で、採集後船上で定点ごとに測定を行ったが、採集出来なかった成貝と、未成貝は海中で計測した。また、アワビに関しては死殻も採集し計測した。各定点とも2名の潜水者で調査を実施した。

- 1) 調査日 平成2年10月2日
- 2) 調査場所 三隅町福浦地先
- 3) 調査員 浜田水産事務所：竹森 昭夫
三 隅 町 役 場：久保田寿夫
三 隅 町 漁 協：見國正美組合長、他6名
水 産 試 験 場：由木雄一、中村初男、木村 秀

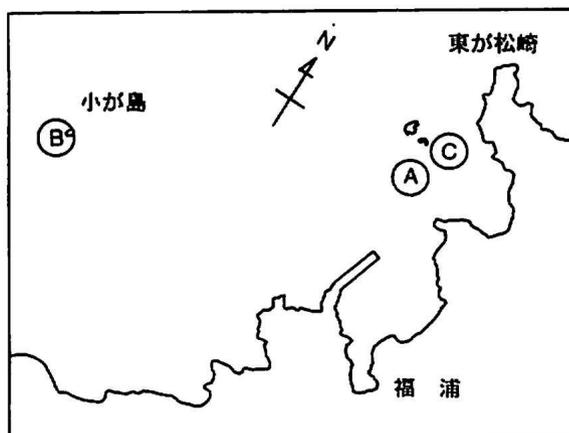


図1 調査海域

表1 定点別アワビ・サザエの個体数

種類	定点 A	定点 B	定点 C	合計
放流クロアワビ	13個(0.32個/m ²)	0個(0 個/m ²)	12個(0.57個/m ²)	25個
天然クロアワビ	3 (0.08)	2 (0.11)	0 (0)	5
天然メガイアワビ	1 (0.03)	3 (0.17)	2 (0.10)	6
サザエ	3 (0.06)	110 (6.13)	2 (0.10)	115
アワビ計	17 (0.43)	5 (0.28)	14 (0.67)	36

() 内数値は1平方メートル当り個体数

調査結果

各定点で確認されたアワビ、サザエの個体数を表1に示す。各定点での調査時間、調査面積が異なるので、単位面積当りの個体数も合わせて表示した。

アワビ

アワビ類は放流クロアワビ、天然クロアワビ、メガイアワビが確認された。全調査点で計36個のアワビを確認したが、このうち放流クロアワビが25個で最も多く、全体の69%を占めている。次に、メガイアワビが17%、天然クロアワビ14%となっている。

表2は放流クロアワビの年令別組成を調査定点ごとに示したものである。これにより放流クロアワビの分布状況を比較してみると、定点Aでは3～9才(殻長6.0～15.7cm)が生息しており、大・中型貝が多い。定点Bでは放流クロアワビは全くみられない。定点Cでは1～7才(殻長3.2～13.8cm)が生息し、その大半は小・中型貝となっている。このように、放流場所である定点Cは放流後2年以内のものが多く、定点Aは放流後2年以上経過した群が分布している。すなわち、クロアワビは放流後1、2年は放流場所周辺で生息し、その後は次第に深場へ移動し、定点Aの水深帯まで拡がり生息しているものと思われる。また、定点Bは放流場所から遠く、放流クロアワビの分散がそこまで及んでいない。

図2は放流クロアワビの死殻を含めた殻長組成を示したものである。これによると、生貝25個、死貝14個となっているが、死殻の大半は10cm以上で、漁獲対象サイズになってから死亡したものである。殻長10cm以上についてみると生貝10個に対し、死殻12個となっている。一般的に、自然死亡は小型の時期ほど大きく、大型になるほど生き残りは高くな

表2 放流クロアワビの年令別分布組成

年令	定点 A	定点 B	定点 C	合計
2才未満	0 個	0 個	8 個	8 個
2～3才	5	0	2	7
4～5才	3	0	1	4
6～7才	3	0	1	4
8才以上	2	0	0	2

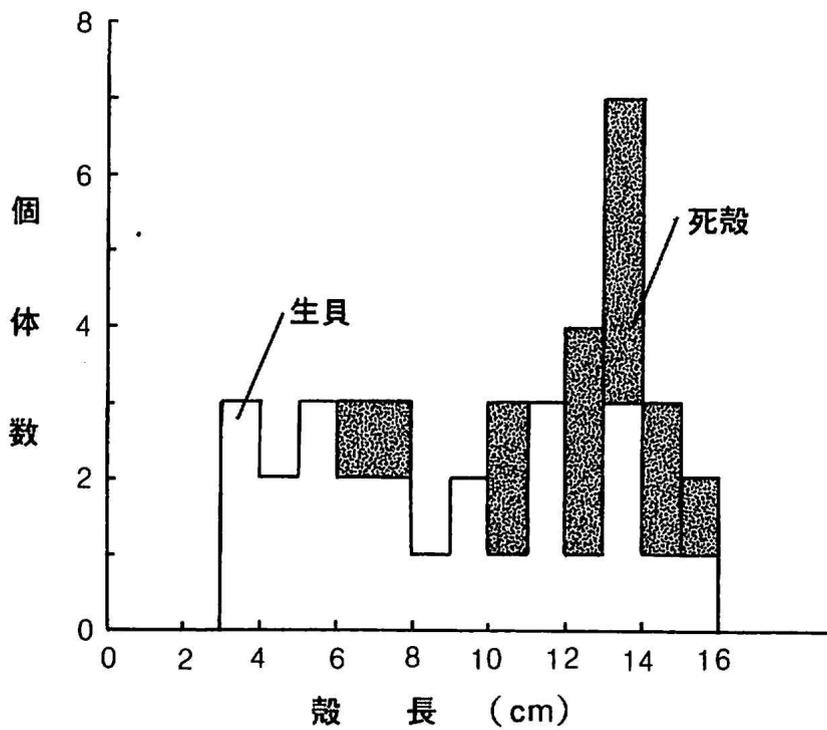


図2 放流クロアワビの殻長組成

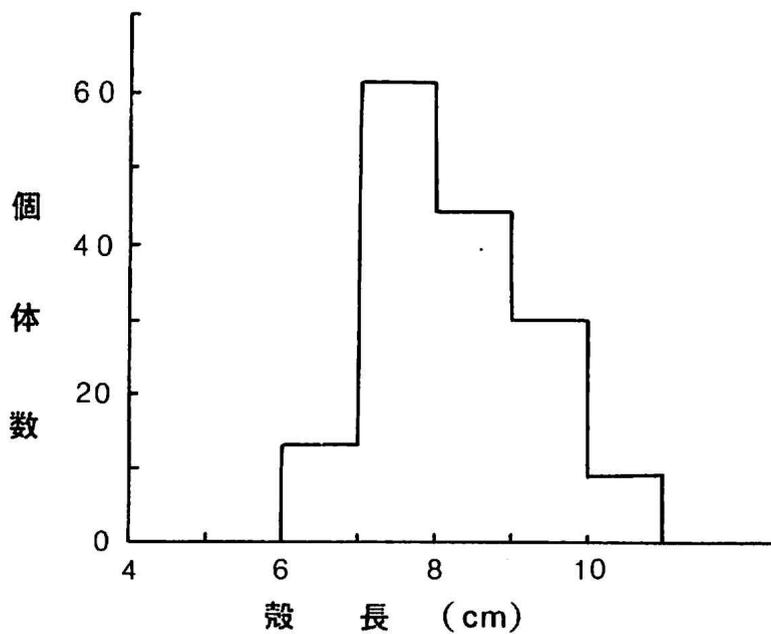


図3 サザエの殻長組成

る。死殻は生貝より発見しやすいということもあるが、それにしても大型貝の死殻の割合が多い。死殻12個のうち死後間もない新しい殻は6個あった。また、死殻のうち1/3はタコの被害によると考えられる細孔が認められた。2/3は自然死亡したものと思われる。

サザエ

図3にサザエの殻長組成を示す。確認されたサザエは115個で、いずれも4～6才の成貝である。定点A、Cで確認されたのはわずかに5個で、他すべては定点Bで確認されたものである。このように、定点Bはサザエが非常に多く、6.13個/㎡という高密度分布域となっている。

考 察

定点Cに放流されたクロアワビは成長に伴い沖合に分散し、放流後約2年で定点Aまで拡がり、この水深帯を中心に生息していると思われる。

定点Cの海底は転石、岩盤が主で、餌料となる海藻も豊富でアワビ若令貝の棲み場とて好条件を有している。今年、昨年放流されたクロアワビの生残状況も良好である。

定点Aは転石帯に人工礁が点在し、主に大型の褐藻類が繁茂している。今回調査した中では、アワビの成貝が最も多かった場所である。放流、天然あわせの密度は0.43個/㎡となっているが、これは、アワビの生息数がかなり多いことを示す値である。ただし、確認されたクロアワビのほとんどが石の下、岩影に付着しており、船上からの磯見等では発見しにくいものと思われる。

当地区では昭和49年からクロアワビを放流しており、平成2年までに約10万7千個の放流実績がある。しかし、これまでにほとんど回収がなされていない。最近では放流後の生残率を高めるために、放流時期、放流方法等が工夫され、その成果もみられ始め、特に若令貝の生残状況は良好である。放流後3年以上経過した成貝の生息数は多いが、同時に死殻も多い。このことから、生息密度が一種の飽和状態になっていることも考えられる。従って、適度の間引きが必要と思われる。

漁獲の方法としては、クロアワビが石の下から出てくる冬期（アワビの値段の高くなる12月が最適と思われる）に磯見で集中的に捕るか、あるいは、年に何回か決め、潜水による漁獲が考えられる。いずれにしても、資源状態を考慮した漁獲量を保つことが大切で、漁獲物の計測等のモニタリング調査を継続する必要がある。